

図書だより

<第34号>

平成8年2月20日

呉工業高等専門学校

図書委員会



呉高専図書館 (田邊達雄 画)

目 次

〔読書感想文〕

- 歴史 「〔凡将〕山本五十六」 M1 牛尾 悟 2
 文学 「壁-第25回芥川賞受賞作品」 M2 首尾木一樹 3
 政経 「そして僕らはエイズになった」 C3 浜本 純平 4

〔随想・読書雑感〕

- 「地震のはなし」 E4 寺尾 広志 5
 「よだかの星」を読んで A5 佐々木裕生 5

〔新任教官の私の推薦する本〕

- 読書に関して思うこと 電気工学科 黒木 太司 6
 今だから読める本 土木工学科 山口 隆司 7

〔新着図書10選〕 8

〔アンケートの結果について〕 10

〔お知らせ〕 図書館 12

〔編集後記〕 図書館長補 柁本 紘二 12

読書感想文

歴史

「〔凡将〕山本五十六」

(生出 寿 著)

M1 牛尾 悟

まず本を読むまでの山本五十六の人物像をまとめると、『天皇か山本かとうたわれた日本海軍史上の英雄の一人である。山本が英雄たるゆえんはその勇猛果敢な軍人魂にあるのではなく、むしろ状況分析能力と判断能力を決定的に欠いた軍中樞部にあって常に合理的思想を持ち続けたことにある(一部文献参考)』と、こんなところだ。あと知識としては、連合艦隊司令長官として、真珠湾攻撃、ミッドウェイ海戦、ガダルカナル島争奪戦などなど戦史にのこる大作戦の立案、総指揮にあたった人物である。とにかく山本はすばらしい人物であると思っていた。

ところがこの本は題名からわかるように、彼をほめたたえてはいない。まえがきでも、「山本は連合艦隊司令長官として名将か凡将か」とか、「山本が真の名将であったなら」とかのべていた。

太平洋戦争のおおまかなながれは、最近はやりのシュミレーションゲームでだいたい知っていましたが、こういった本を読むのははじめてで大変おもしろく読むことができた。今までしらなかった言葉のやりとりや提督(山本)の人がら、日米開戦へのいきさつなんかはとてもおもしろかった。

提督の人がらといえば彼は、かなりのバクチ好きだったらしい。ひまさえあれば、賭け将棋、囲碁、マージャン、トランプ、花札、ルーレット、玉突きなどをやっていたそうだ。意外だった。

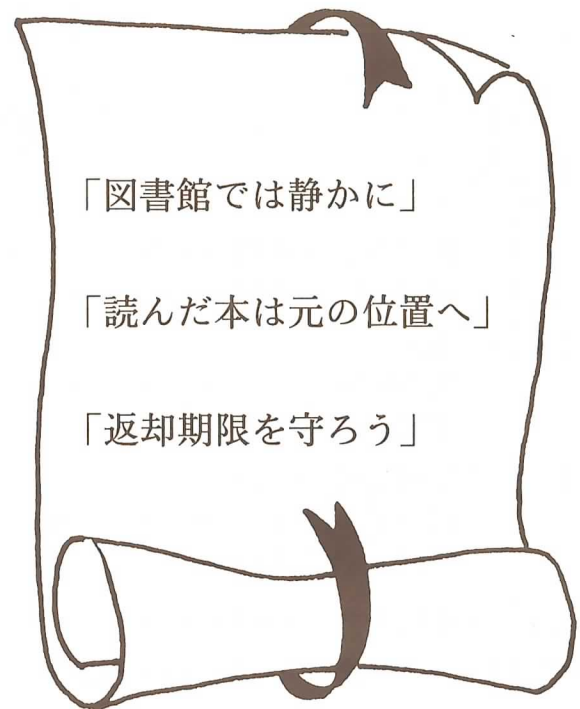
はじめて知ったことでとても興味があったのが“暗号”である。米国海軍はミッドウェイ海戦のころから日本海軍のすべての暗号を解読していたのである。なぜかという、二月二十四日にウェーキ島を襲撃したとき、つかまえた日本の監視艇の

中から暗号書を発見したらしい。しかも日本海軍が知ったのは太平洋戦争が終わってからだったということだ。本当にひさんである。

ついでにミッドウェイ海戦についてだが、これは提督の決断ミスであったと思う。あまり深くは考えたくないがもっとちがう作戦をとってればこんな結果にはならなかったと思う。(ちなみに日本側の損失は、戦死約三千六百名、うち搭乗員約五百名、飛行機喪失約三百二十機、自沈=赤城、沈没=加賀・蒼竜・飛竜)

そして山本五十六の最後もまた、ひさんなものだった。それは他の誰のせいでもなく、山本自身のせいであつたらう。

総合的に見て、山本五十六は連合艦隊司令長官としてはミス・キャストではなかったのだろうか。まさに悲劇の名将である。



文学

「壁」 (第25回芥川賞受賞作品)

(安倍 公房 著)

M2 首尾木 一樹

僕はこの本の「壁」という題名に興味をひかれた。たった一文字の題名だったので、何となく謎めいて面白そうだったのだ。実際読んでみてもその印象は変わらなかったのだ、思ったより早く読み終えることができた。

この作品の中で作者は「壁」というものの他にもう一つこだわっていたものがあつたと思う。それは「砂漠」というものだ。一見すると「壁」と「砂漠」というものは全く異なったもののように感じる。しかし僕は、よく考えてみると実は同じようなものではないかと思ったのである。

なぜかという、まず「壁」について考えてみると、例えば目標を立てて何かをやろうとしたとする。こんな時には必ずと言っていいほど、それを妨げようとする「壁」があるものだ。そんな時、この「壁」を乗り越える勇気となるものはいったい何だろうか。それは壁を乗り越えれば何かいいことが待っているのではないかという「希望」ではないかと思うのだ。

また「砂漠」についてもその果てのさらに向こうには何かあるのではないかと「希望」がわくに違いないと思う。砂漠には行ったことがないのになぜそう思うかという、旅行か何かで、海の彼方まで何もない水平線の見える風景を見ると何だか感動するし、その一方であの向こうには何かあるのだろうかと思うからだ。

こんな事から同じものではないかと考えたわけである。だから何かが目にある「壁」の状態も、全く何もない「砂漠」の状態も同じような感じではないかと思うのだ。

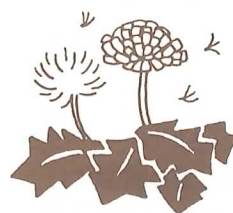
さっきの例とは逆になるが、何も目標を立てないで何かやってもうまくいかないし、かといってびっちり目標を立てすぎてもうまくいかないの

も、結局は「砂漠」と「壁」と同じ関係ではないのだろうか。

この作品の特徴のもう一つに面白い内容なのに加えて、しっかり社会に対する風刺も含んでいるということがあると思う。このことがこの作品を一層読みごたえのあるものにしていていると思う。「事業」という、ソーセージの肉に果てには人肉を使うという内容の話でそのことを強く感じた。ここまで極端な例は実際にはないと思うが、今の世の中において似たようなことはたくさんある。それは「企業優先」という考え方だ。売れさえすれば何でもいいという商品をつくっているのはその例だ。またつくる人の事を考えずにただ単純な作業を繰り返し車をつくるラインなどもそうだと思う。

また「魔法のチョーク」という話では、壁に魔法のチョークで描けばそれが実物となって出てくるという便利な物について書かれてあつた。僕も読んでいて実際にあれば便利だなと思っていた。しかし読み進めていくにしたがって欲しくなくなっていった。というのも魔法のチョークで出来たものは日光に当たると再び絵になって壁にもどるといふ欠点があると分かったし、その上結末は絵に描いた壁を食べ過ぎたアルゴン君という登場人物が壁に吸い込まれるというあわれなものだったからだ。作者は都合のよい便利な物には裏があるということをおもうとしたのではないかと思う。

題名で選んだと言っているいいこの本だったが、本当に奥の深い楽しい作品だったと思う。この本には「壁」と「社会」について非常にうまく書かれてあつたと思う。これから先、僕もいろいろな「壁」にぶち当たると思うが、そんな「壁」を乗り越えていける、努力する人間になりたいと思う。



政 経

「そして僕らはエイズになった」

(石田吉明・小西温子 著)

C3 浜本 純平

今回読んだ本は「そして僕らはエイズになった」という本で、血液製剤のためにエイズに感染した石田吉明という人と小西温子という人が書いたものです。石田吉明さんは、生まれたときから血友病で、すでに同じく血友病の兄弟二人をなくしています。血友病とは、血液中の血しょうが少ないために出血しても止血するのに大変手間がかかります。そのため、ちょっと打ったくらいでも内出血し、ものすごい痛みを生じます。そんな血友病の患者の治療に用いられていたものは時代によって変わっていったが、はじめは輸血、次にクリオという血液製剤が登場し、そして問題の高濃縮製剤の時代がやってきます。輸血やクリオの時代では、まだ内出血や、外傷による出血が怖いと感じ、外出もろくにできなかったが高濃縮製剤の出現によって血友病患者に夜明けがきたかと思われました。

そんなとき、アメリカでゲイや、麻薬常習者の間や、血友病患者の間に“エイズ”が広がってきた。原因は血液によって感染するとみられ、ヨーロッパではアメリカからの血液製剤の輸入を禁止する措置をとったのに対し、日本の対応は遅れに遅れ、研究班を発足させるのがやっとのところだった。さらに血友病患者に対し、血液製剤による感染は、1,000人に1人の確率だろうと、なぜかうその報告をしている。石田氏はこのことについて、売れ残った血液製剤を売りさばくためだと言う。更その後アメリカで加熱製剤の開発に成功したにもかかわらず、日本はそれを輸入することを禁止し、自国でそれが生産できるまで、2年余り結局非加熱製剤を売り続けた。

またこの本で一番気になったのが、なんといっても差別の問題だ。マスコミにより誤った知識が

植え付けられ、過剰に反応した読者からの差別が始まり、結局学校、就職、結婚などで差別を受けることになる。またそれに伴って医院のほうでも患者に触らない医師が発生したり、患者が寄りつかないという理由からか専門医がいないとか、ひどいところでは、医院の前に“うちにはエイズ患者はいません”などの貼り紙をるところまであった。更に救急車までもが患者がエイズだと知るといろいろ注文をつけて、到着に2時間もかかったりというありさまである。更に衝撃を受けたのが、やはりマスコミだが、石田氏が、テレビ局で子どもと一緒に番組を撮り、その後雑誌に番組が成り立つ前のことが書いてあり、出演する生徒の父母にまずアンケートを取ったあと石田氏にあう生徒を選び出し両親と面接を申し承をえうえ……と、そして、出演した生徒は、感染しないことだけを考えて、と書いてあった。これからも、エイズ感染者は、あたかもエイズ人のように扱われているようだし、この記事を感染者が読んだらどう感じるかなど全く考えられていないようだ。エイズはまだ特效薬もない治らない病気であるとは思うけど、感染者も僕らと同じ人間であり、悲しかったり、嬉しかったりする。全然特別でも何でもない。今知らなければいけないのは、彼らが受けている心の重荷はものすごいものであり、その原因は僕らにあるということであり、それらを解決するにはまずエイズをよく知り、そこでどうすればいいかを考えることから始まると思う。



随想・読書雑感

「地震のはなし」

(浜野 一彦 著)

E 4 寺尾 広志

地震、雷、火事〜とうたわれるが、地震は最初にあげられるように一番恐れられているものだ。自分は雷が一番苦手だが、95年はじめおこった関西大地震を見てやはり地震が一番怖いと思った。日本は地震の多い国である。自分はその日本に住んでいるが中国地方は其中でも少ない地域でこれといった恐さはないように思える。が、そんなに関心のなかった地震だが関西大地震以来興味をもったため地震に関する本をよく読むようになった。何冊かは読んでみた。どれも同じような内容だが、作者によって地震に対する考え方がちがっているのは面白いと思った。地震は自然現象の中でも破壊的で自然現象だけに起こそうとおもっておきるものではないし起きないだろうと油断したときおこりやすいもので、ほんといつどこでおきるかわからないものである。現在いつおこるかとは予知を可能にするため努力がつけられているようだが、さきの関西大地震のときは、あれほど大きなものにもかかわらず予知すらできていなかった。だが予知できたとして、それを公表したときの混乱が大きすぎてより大きな事件がおきてもしょうがない。関西大地震について思うことは日本は予知にこだわりすぎて、いざおきたときその後の対策についてはおろそかであることだ。地震発生後、毎日あたふたして今でもいろいろな問題がのこっているようである。ロスで大地震があったが、アメリカの対策システムが発達していたため再建も早かったようだ。かといって、「地震がおきたらおきたとき…」などと、なげやりもよろしくない。よくいわれるように普段から心の備えがかんじんである。自分は地震に興味があり、大地のゆれに敏感なのか知らないがトラックが前

の道を通ったくらいで「地震だ。」と、心の備えをその都度してしまう。またそこで次の行動を考え実行できるかは難しいところである。

「よだかの星」を読んで

(宮沢 賢治 著)

A 5 佐々木裕生

私は数学が苦手である。かといって文学に興味があるわけでもない。しかしそんな私でも素晴らしい文学に触れ、歓喜や悲哀に打ち震えることがある。最近、私は明治生まれの文豪の童話に震えっぱなしである。童話のくせして奥が深い。表現力が素晴らしい。殊に自然を表現する語彙の斬新さは天才としか言いようがない。正直言ってお子様の私には良く分からない言葉が多い。それでも彼の童話は原子単位で語りかけてくる。彼の名は「宮沢賢治」。ちょっとした有名人である。彼の作品の一つに「よだかの星」という話がある。姿の醜いよだかという鳥が他の鳥の皆さんにいじめられて、その苦衷から逃げようと飛び続けるうち、いつの間にか星になっていたというだけの話なのだが、読み進むうちにさまざまな声が聞こえてくる。これこそまさに賢治マジックである。「よだかは、じっと目をつぶって考えました。(いったい僕は、なぜこうみんなに嫌がられるのだろう。…僕は今まで、なんにも悪いことをしたことがない。…)」よだかの独り言の一節である。短い文章で、無理矢理、心の奥底に押し込めた感情や己の醜悪さ故の悲しみが浮き彫りにされる。しかし、よだかはさらなる己への悲しみに遭遇する。「また一疋の甲虫が、夜だかの咽喉に、はいりました。そしてよだかの咽喉をひっかいてばたばたしました。よだかはそれを無理にのみこんでしまいましたが、その時、急に胸がどきっとして、夜だかは大声をあげて泣き出しました。」他の存在を犠牲にしな

ければ生きていけない己の姿に気付いたとき、引き裂かれるような痛みを感じるのは私達人間と同じである。それは確かに己の醜悪さ故の悲しみを遥かに超えた感覚として私達に迫り来る。『他の存在の犠牲の上に自分の幸福は成立している。』その現実を見据え、よだかは地上にとどまる全生物に別れを告げ飛翔する。「灼けて死んでもかまいません。私のようなみにくいからだでも灼けるときには小さなひかりを出すでしょう。」透明な覚悟を抱き、よだかはやっと私達に安堵の表情を見せてくれる。「そして自分のからだがいま隣の火のような青い美しい光りになって、しずかに燃えているのを見ました。」万物の本当の幸いを純粹に願いながら、よだかはひかりになる。賢治がこの童話で私達に伝えようとしたのは『万物の本当の幸いとは何か』ということのような気がしてならない。幸せになろうとすればするほど他の存在を傷つけてしまう相反性は、他の作品の随所に見られる。その解答は人それぞれだし、あまり深く考えるとお子様は頭が痛くなるのでこれで終わりと致します。

読んでみませんか



新任教官の推薦する本

「読書に関して思うこと」

電気工学科 黒木 太司



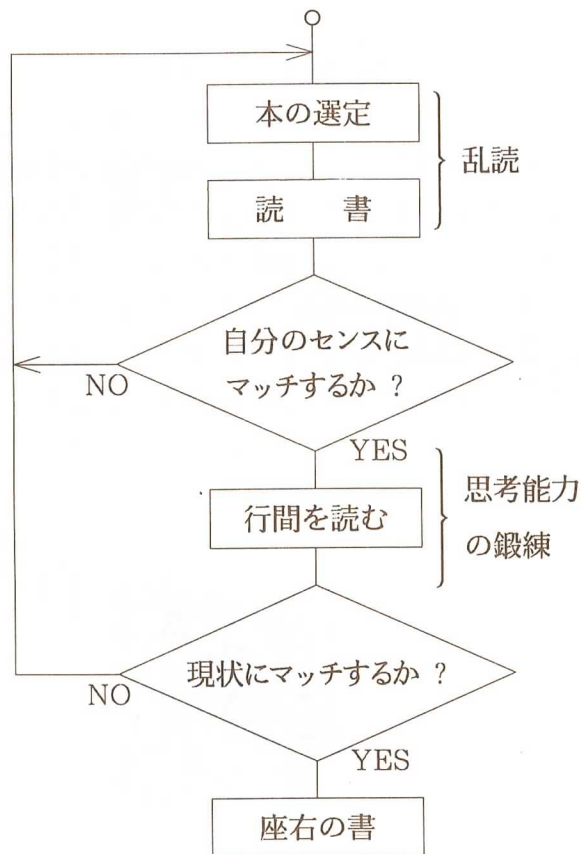
私が本校入学の許可を賜ったのは昭和50年でして、広島カープ悲願の初優勝とも相まって、その頃より「ベースボール」を愛読するようになりました。恥ずかしながらこの週刊誌が私の読書欲の始まりでして、これを契機として大和球士著「プロ野球三国志7～12巻」を購読するに至るや、著者の明朗にして快活なる快刀乱麻風文体に心躍らし、またカープ球団創立時の臥薪嘗胆たる実情にふれて、感涙にむせぶことを覚えたのもこの頃でした。

おりしも私は、薦める人あって、素行矯正のため柔道をやっております、その関係で原康史著「柔道三国志」なる本に出会いました。これは講道館揺籃期、嘉納治五郎先生が姿三四郎を筆頭とする自家葉籠中の弟子達とともに日本の柔道を切り開いて行くと言う、いわゆる実録編であり、私事で恐縮ですが、大事な試合の前夜、高鳴る胸を鎮めるべくこの本を読んだところが却って闘争心が沸き上がり、不眠にて試合に臨んだ思い出があります。当然大敗致しましたが……。

この2冊に感化されてか、その後は三国志ものを捜し、本家本元の三国志は大作かつ難解なのでパスしましたが、ひいては東海遊侠伝の大立者、清水次郎長一家の顛末記、村上元三著「次郎長三国志」なども読みあさりました。そのおかげで、気が付いた時、私自身すっかりGNN的人間になってしまいました。(注：GNNとは、G;義理、N;人情、N;浪花節の略であり、日本広しと云えども、おそらく私のほか2、3人程しか使用していないテクニカルタームと存じますが!?)

本稿の結論はこの点にあります。皆さんのような多感な年代における読書は、その後の人間形成に少なからずとも影響を及ぼしてしまうと云うことであります。めまぐるしく変化する現代にあっては、かかるGNN如き信条のみでは、とても社会は認めてくれない。これは誰しもが実感するところであります。私もこれを改めるべく、最近では睡眠前の30分間、堀勇雄著の「山鹿素行」を読んでいます。ところがこれまたGNNの超最先端を先陣切って突っ走るような人物の伝記でして、どうも私の中からGNNを加筆訂正するにはここ当分の時間を要しそうです。

賢明な皆さんに於かれましては、私のような古くさい不逞の輩に成らぬためにも、ぜひ今のうちに自分たちにマッチした、そして情報化社会を生き抜くにふさわしい愛読書を見つけ、これを座右の書として世の中に羽ばたいて頂きたい。最後に私の読書に対するフローチャートを図示させていただきますが、今もって無限ループから抜けられません。私も皆さんに推薦できるような愛読書を見い出すべく、遅々たる歩みではありますが日々精進して行きたいと思っております。



「今だから読める本」

土木工学科 山口 隆司



私は長岡高専の出身です。高専卒業後、長岡技術科学大学、同大学院を經由して平成7年の春から呉高専でお世話になっております。この度は、

「図書だより」より紙面を戴きましたので、10代から20代前半までにしか読めない本の紹介と、わたくしの紹介とをPart I、II、IIIでさせていただきます。

Part I: 高専での生活は、ややもすると閉塞気味になっているのではないのでしょうか。眠っている感性を呼び起こす本をここに3点挙げます。

①「竜馬がゆく」(司馬遼太郎)は、高専時代の必読書です。坂本竜馬は御周知のように天下に大を成した人です。竜馬が江戸に上京して名をあげ始めたのは、高専の学年にすると5年生の頃で、それまでの竜馬は人とさほど違っていませんでした。竜馬は32歳(卒業後12年)で刺客に殺されてしましますが、この間猛烈な生き方をしています。「竜馬がゆく」で面白いところは、天下をあっといわせる巨人のなり方には“大器晩成型”があり、高専の学生にとって今日が巨人となるチャンスの日であると知らせてくれるところです。「竜馬は32歳までに猛烈な生き方をしたのに、ぼくは一体なにをやっているのだろう」と、かき立てられるものがあります。②「峠」(司馬遼太郎)は、戊辰戦争の折、幕府軍となった河井継之助(つぐのすけ、越後長岡藩)が侍として本分を全うするプロセスのお話です。③「蒼き狼」(井上 靖)は、元の皇帝チンギス・ハーンの幼少から晩年までの強かでカッコイイ様子とモンゴルの情景を映し出した逸品です。チンギス・ハーンは史上最大の帝国を築き、人間に潜在する野心と欲求がこれほど大きいものであることを示した人です。いま日本で暮らしていると、地球征服などというスケ-

ルの大きい感性は衰弱して消え失せてしまいそうです。「蒼き狼」を読んでスケールをビックにしましょう。

Part II: さて、わたくしは、大学の学部から大学院の1年生まではインディ・ジョーンズ（考古学者、探検者）になりたいと考えておりました。インディになるためには自然科学（わたくしの専攻する環境工学）に加えて人文科学、社会科学を身に付けなくてはなりません。以下は、その頃にあわてて且つ楽しく読んだ本です。これらの本には、読んでいるうちに、主人公にとって代わりたいたとさんざん思わせられました。「三四郎」（夏目漱石）、「青春の門」（五木寛之）、「履歴書」（南方熊楠）、「われら戦友たち」（柴田 翔）、「キタ・セクスアリス」（森 鷗外）、「荒野の狼」（ヘッセ）、「語られざる哲学」（三木 清）、「日本文化論」（梅原 猛）、「かのやうに」（森 鷗外）、「自然と象徴」（ゲーテ）、「幸福論」（アラン）、「小説マルコポーロ」（陳 舜臣）。これらの中でも特にわたくしを魅了し、危険であったものは「荒野の狼」でした。

この頃、読み本の他に詩集や美術図鑑にもとりつかれました。美術図鑑で素っ裸のヤクシニー女神像を観たときは、下から覗き込んだりもし、その秘めたる蠱惑美（こわくび）に邪心がどこかへ飛んでいく体験をしました。この観賞後、インドまで現物を眺めに行き、良い思いをしました。

Part III: 大学院生になったわたくしの興じたところは、映画、音楽です。が、自然科学に携わるものとして、技術・科学者のありようを考えることも遅ればせながら不可欠と感じ、「技術家評伝」（三枝博音）、「中国の科学文明」（籾内 清）などから栄養を搾取しました。

大学の研究室では環境工学に漬かりました。

最近、世界の先端をゆく理工系の者において情報に疎いとはうまくないと感じ、ビル・ゲイツが今後十年程の情報産業、特に情報ハイウエイ展望について記した「未来を語る」を読みました。

本でも何でも、感性を磨くものを体感しましょう！

新着図書10選

「食べる漢方」

重野 哲寛著 （プレジデント社）

現代医学のみのアプローチでは対応できなくなっている現代病も、食事を変えれば一発逆転と銘打って、世界最古の薬学書と言われている中国古代の「神農本草経」と明代の李時珍がまとめた「本草綱目」に収録されている365種類の食品に注目した作者が、ガンからアトピーまでの実践食事学を分かりやすく教えてくれている。

（柘本記）

「中国人の超歴史発想」

王 敏著 （東洋経済新報社）

餃子の原形はみみであり、うどんは不老長生を願った食品であり、饅頭は人の頭であると、食べ物ぎょうざの起源と古代中国人の発想を示しながら、日本留学の経験を持つ彼女は、日本と中国の比較の中で、三つのショク「食」「職」「色」について分かりやすく、おもしろく書いている。

（柘本記）

「日本の侵略 漫画に見る 日中戦争時代 中国の抵抗」

石子 順著 （大月書店）

日中戦争時代に日本と中国の漫画家が、それぞれ国と人々をどのように描いていたかという作品を集めた一書である。何が分かり、何が見えてくるのか、漫画から汲みあげられる教訓は果てしなく広く、深いと、漫画表現のすごさと威力が感じられるのではないかと、作者は言っている。

（柘本記）



「工業振動学」

中川 憲治〔ほか〕著 (森北出版)

機械系または建設系学科における振動学の教科書で、構造物の動的挙動の基礎理論が記述されている。初版以来20年も経過しているが、標準的な教科書として使われてきたものであろう。不規則振動、自励振動あるいは非線形振動など興味深いテーマも含まれている。コンピュータによる振動解析や制御工学の手法も考慮されている。本校におけるカリキュラムの作成にも参考になると思われる。

(辻記)

「機械工学概論」

関口 久美〔ほか〕著 (コロナ社)

機械科以外の学生にも、機械工学の概要を習得できるように図面を多く取り入れ要領よくまとめて記述されている。また各章の例題と多くの問題は、読者の理解を大いに助けるであろう。

(池上記)

「自動車工学」

樋口 健治著 (朝倉書店)

学生対象のやさしい解説書〔内容〕自動車一般、自動車の基本性能、性能試験法一般、自動車に作用する力とその運動、動力性能、ブレーキ性能、操縦性と安全性、自動車用原動機ほか。

(池上記)

「技術英語ハンドブック」

砂原 善文監訳 (朝倉書店)

英語を母国語としない人が技術英語論文等をまとめるときの基本と陥りやすい点を、具体的な英文を多く例示して体系的に解説されている。〔略目次〕技術文書作成パターン／注意したい語句等

(池上記)

「メカ音痴のためのエンジンパワーの話」

GP企画センター編 (グランプリ出版)

本書は2ページごとに1つのテーマについて図と漫画(4~7コマ)を使って解説している。教科書的な順序を全く無視してはいるものの、基礎的な工学知識なしで理解できるよう非常に手間ヒマをかけていると感じた。数人で雑談するのにちょうどいいネタがたくさん詰まっている。

(野村記)

「土木と社会」眼で見るCivil Engineering

久保村圭助、高橋裕編 (山海堂)

学生や若手技術者を対象に、さまざまな土木構造物や施設、技術などをカタログ的に紹介した本。写真と解説を通して土木工学に親しんでもらうことをねらっている。前編では交通施設や水施設などの社会資本、橋梁やトンネルといった構造物の概要を説明。後編では現実の土木事業のプロセスに沿って計画、設計、施工、管理の順に解説を行っている。また、防災についても触れるなど、土木を網羅する内容になっている。

(阿部記)

「河川風景デザイン」

島谷 幸宏編著 (山海堂)

本書は、写真や図表を数多く用いながら、河川景観における景観評価、景観の基本事項と特徴、景観整備の計画・調査・設計、景観設計手法について述べてある。

景観の評価は人によって異なるのか。そこに多様性が存在するのか。良好な景観の創造に一定の定石が存在し得ないか。そうして、美しい風景や景観を後世に残すことは、土木技術者に与えられた使命とはいえないか。と、問題意識は持ちつつも、肩肘張らず絵本感覚で読んではいかがか。

(市坪記)

アンケートの結果について

図書館では「よりよい図書館」を目指し、皆さんの利用状況・利用目的・要望などを知るため11月末にアンケートを実施させていただきました。830人中623名の皆さんから回答をいただきました。ご協力ありがとうございました。

(回収率は75%でした)

記入していただく項目にも要望や備えて欲しい図書など数多くいただきました。

集計結果はグラフで示しました。

集計結果で、目立つところ・気になるところは次のものです。

1. 図書館の利用頻度をみますと、85%の人が月に1~2回以上は利用しています。多くの皆さんに利用していただいていることがわかりました。
2. 図書の貸出についても、毎月は借りださなくても数カ月に1~2回以上利用されております。
3. “学習に役立つ本”や“読みたい本”は「ある」と答えた人が多かったので、もっと借りてもらえることを期待します。
4. “利用する分野”では「専門科目」という回答がトップで高専らしさが表れています。
5. “読みたい本はどのようにして手に入れますか?”は、半数以上の方が「自分で買う」と回答されています。
6. “普段読む本”で「マンガ」と答えた人が一番多いのも驚きです。学年別に見ても各学年共トップでした。マンガを読むとともに図書もおおいに読んでもらいたいものです。図書とマンガの購入費の質問では、図書費を記入した人よ

りマンガ購入費を記入した人が多いのですが、図書は図書館で借りてマンガは自分で買うのでしょうか。

7. “購入希望図書”の用紙を「知らない」人が半数以上いたことも残念なことです。もっと活用してください。

次に、要望のなかで多かった意見は次のものです。

1. 「新しい本」や専門書を増やしてほしいなど資料に関する事が一番多かった要望です。
2. 次が「静かにして欲しい」など図書館の環境・設備に関したことです。図書館で「静かに」するのは当たり前のことですから、守ってください。

この他にも、図書館員に対する要望などありました。

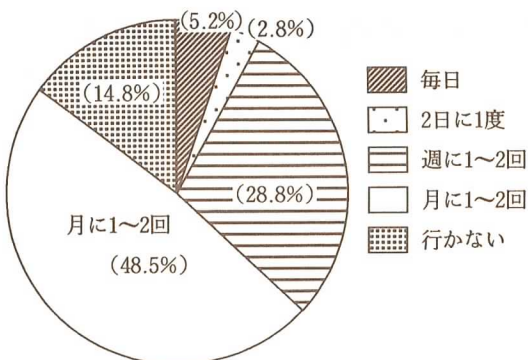
また、皆さんから提出していただきました購入希望図書は、図書委員会に諮り認められたものから購入していきます。購入した図書は図書館の掲示板でお知らせいたします。

これからも購入希望図書またはご意見などありましたら図書館カウンターまたは「投書箱」へどしどし出してください。

図書館では皆さんからの意見をこれからの図書館運営に反映して行きたいと考えております。要望のなかの「新しい本」は「専門書」を増やすことは最重要課題として取り組んでいく予定です。

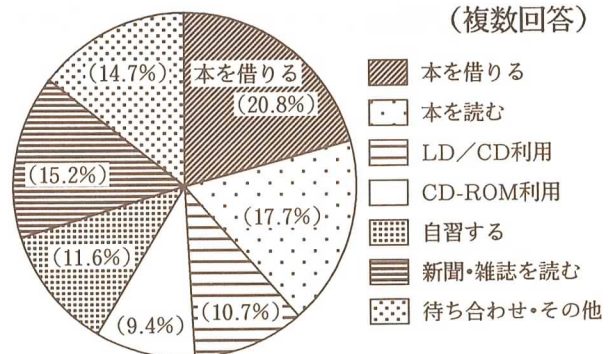
より一層の利用を期待しております。

1. 図書館の利用頻度はどれくらいですか？

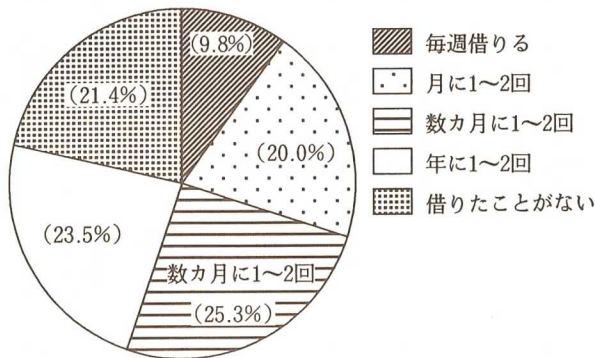


2. 図書館を利用する主な目的は何ですか？

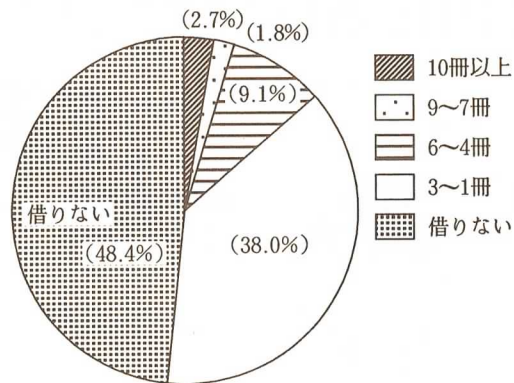
(複数回答)



3. 本を借りる頻度はどれくらいですか？

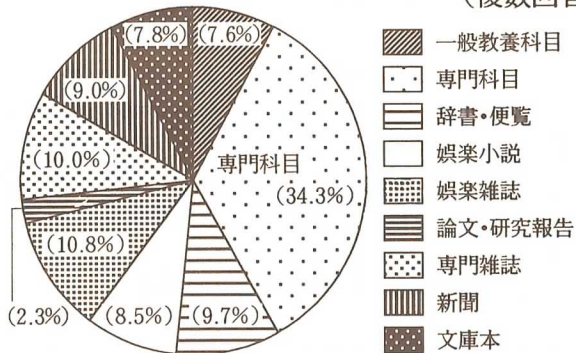


4. 月に何冊（合計）くらい本を借りますか？

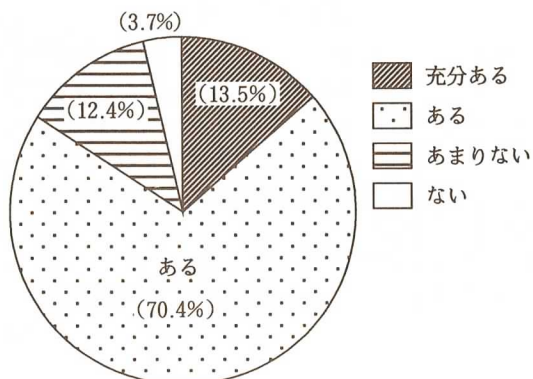


5. どの分野の資料をよく利用しますか？

(複数回答)



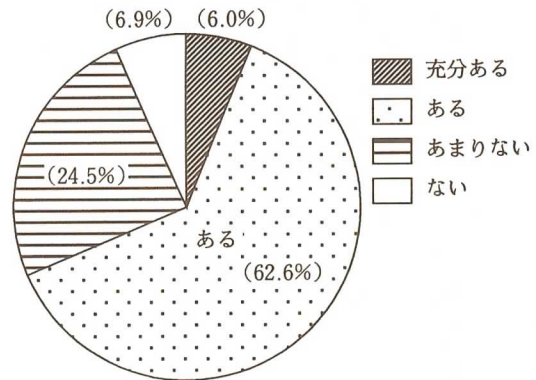
6. 学習に役立つ本は充分ありますか？



7. 学習に役立つ本が“あまりない”、“ない”と答えた人はどの分野が少ないと思いますか？

コンピュータ関係	5
事典・参考図書	1
哲学・歴史・社会科学	9
問題集等	2
自然科学	7
工学関係の専門書	41
語学	2
スポーツ	5
すべての分野	8
その他	14

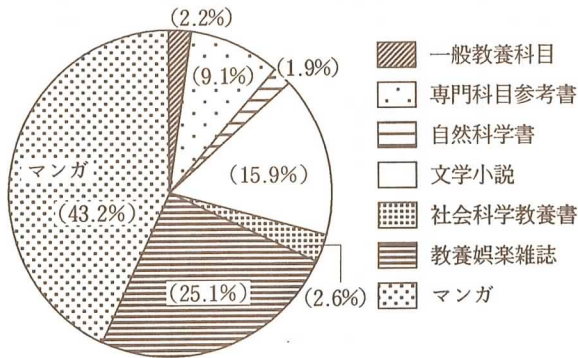
8. 図書館に読みたい本はありますか？



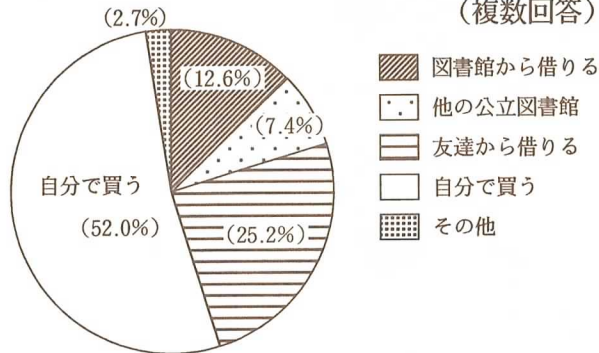
9. 読みたい本が“あまりない”、“ない”と答えた人はどの分野が少ないと思いますか？

コンピュータ関係	5
哲学・歴史・社会科学	6
自然科学	3
工学関係の専門書	12
音楽・芸能・娯楽	22
スポーツ	15
文学（英語含む）	23
ファッション	3
雑誌	18
文庫本	12
漫画	25
新刊書・その他	9

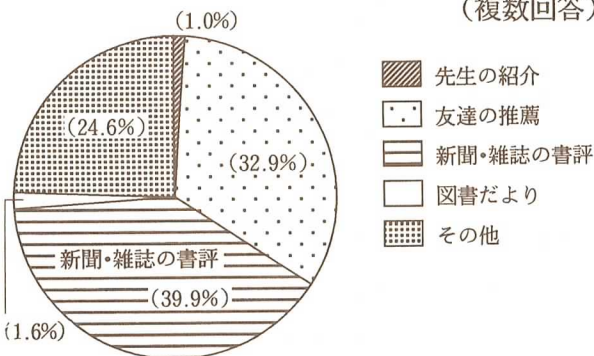
10. 普段どんな本をよく読みますか？
(図書館の資料以外) (複数回答)



11. 読みたい本はどのようにして手に入れますか？
(複数回答)



12. 読みたいと思う本は何で知りますか？
(複数回答)



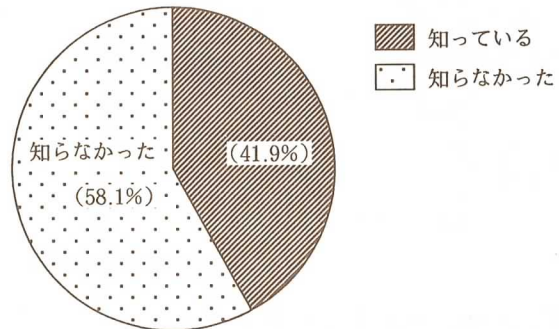
13. 1か月に自分で買う図書の費用はどのくらいですか？ (漫画は含めない) 回答者=366人

金額	人数	比率	金額	人数	比率
~1,000	86	23%	3,000~5,000	24	7%
1,000~2,000	178	49%	5,000~	18	5%
2,000~3,000	60	16%			

14. 1か月に自分で買う漫画の費用はどのくらいですか？ 回答者=426人

金額	人数	比率	金額	人数	比率
~1,000	164	39%	3,000~5,000	24	5%
1,000~2,000	176	41%	5,000~	7	2%
2,000~3,000	55	13%			

15. 図書館に「購入希望図書申込書」があるのを知っていますか？



16. 図書館についての要望があれば記入してください。

たくさんの要望をいただきました。1件1件それぞれ違いますが、大きく分けて次のような要望でした。

資料(図書・雑誌・新聞等)にかんすること	77件
環境・施設に関する要望	41
視聴覚資料(LD/CD、CD-ROM)と設備に関すること	31
貸出条件・開館時間に関する要望	21
その他図書館員に対する要望等	10

お知らせ

春休みの長期貸出と休館について

- 春休みの長期貸出
貸出取扱期間 平成8年3月5日(火)~平成8年4月3日(水)
貸出冊数 5冊
返却期限 平成8年4月10日(水)
5年生の皆さんへの貸出取扱は2月29日(水)まで行います。
- 春休みの休館
作業のため次の期間休館いたします。
休館 平成8年3月25日(月)~平成8年3月29日(金)
上記休館の日以外は月~金 9:00~17:00 (土は休館)は開館していますので、利用してください。

編集後記

第34号の図書だよりをお届けします。今回は、先だって学生の皆さんにアンケートをお願いしましたが、その集計結果をまとめてみました。詳しくはアンケートの結果についての項を御覧ください。希望図書を挙げてくれた学生も多数いました。こんな図書館であれば素敵でいいなと言った夢ふくらむような意見でも何でも結構です。図書館に今以上の関心を持って、積極的な意見や要望をお寄せください。お待ちしております。

(図書館長補 柘本 紘二)